

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.59(2019年1月号)◆

遅ればせながら、皆さま新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いたします。1月の研究会は今週末の26日が最初です。その後、3月30日、そして4月は19-20日に英国ベルファストのクィーンズ大学の研究者との合同シンポジウムを開催する予定です。詳細はまたご連絡いたしますが、どうぞご予定下さい。Facebookでも情報を発信しておりますので、どうぞご覧下さい。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは、すでに第29回を重ねており、藤本直樹さん、天野知幸さんをはじめ、いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第124研究会】(12月15日(土)9時30分～18時00分)

国際シンポジウム「日中戦争をめぐるジャーナリズムとプロパガンダ」

・第一部：ジャーナリストと日中戦争

島田大輔(立命館大学)「日中戦争前夜における日中新聞人の共鳴と提携」は、『東京朝日』の太田宇之助の「中国再認識論」を日中戦争前夜に注目し評価した中国の論者、特に『大公報』の張季鸞が唱えた対日宥和論に注目し、戦争抑止を目指した日中ジャーナリストの活動を明らかにしました。土屋礼子(早稲田大学)「日中戦争期のアジアにおける英国の対日宣伝とジャーナリスト」は、英国外務省極東局と情報局が協力して行ったアジアでの対外宣伝を、特にプレスアタッシュの動きから明らかにする試論を展開しました。ピーター・オコーノ(武蔵野大学)「「サパジャー」立場転換：日中戦争下の上海英字メディアにおける変化」は、白系ロシア人漫画家サパジャー(筆名)が上海の英字紙に発表した漫画の変遷から、反共の立場から西側諸国支持から日独支持賛同へ転じた過程を紹介した。

・第二部：中国におけるプロパガンダの展開

シェルゾッド・ムミノフ(イーストアングリア大学)「東北アジアでの日ソ対立と日中戦争期におけるソ連の宣伝工作、1931-1945」は、日中戦争時における旧ソ連の報道資料を用いて具体的にプロパガンダの事例を紹介、分析した。曲揚(早稲田大学)「日中戦争期の華北占領区における日本の宣伝工作—『庸報』の文芸関係記事の分析から」は、華北占領区において日本が経営した『庸報』に掲載された文学理論、評論、小説の分析を通じて、プロパガンダの方向づけと中国人作家の表現の実際とのズレを明らかにした。劉茜(早稲田大学)

「『武漢報』にみる中国内陸部における日本軍の宣伝」は中支派遣軍経営の中国語新聞『武漢報』を題材にして「抗日」意識に対抗するプロパガンダがどのように構築されたかを分析した。梅村卓(明治学院大学)「『聯合画報』とOWIの対華宣伝」は、OWIの中華機構であるAISが刊行した週刊『聯合画報』についてアメリカの対中宣伝の中核を担う雑誌と位置づけその報道と宣伝の実際を考察した。

・第三部：戦後

加藤哲郎(一橋大学名誉教授)「731部隊軍医少佐・長友浪男：戦後厚生省強制不妊手術

担当から北海道副知事へ」は、旧満州で人体実験・細菌戦を実行した 731 部隊の軍医少佐でペスト防疫隊長であった長友浪男が、戦後に厚生省に潜り込み、旧優生保護法の下で強制不妊手術を担当する公衆衛生局精神衛生課長になり、不妊手術全国一の北海道で、副知事として「不幸な子どもを産まない運動」を推進し、優生運動の指導者になった問題を、1981 年の森村誠一『悪魔の飽食』から 2017 年の NHK スペシャル「731 部隊の真実」に至るまでのメディア史の観点から論じた。

梅森直之「ロックフェラー財団と文学者たち：Faulkner at Nagano をめぐって」は、ロックフェラー財団が 1953 年から 1962 年にかけて行った日本の文学者を対象とする米国留学プログラムが、対日文化政策として知られているが、同時期に日本で行われたウィリアム・フォークナーの一連の講演を中心に、当時の日米交流の一つの系譜を明らかにした。

●3月以降の 20 世紀メディア研究会の開催予定は、3月 30 日(土)、4月 19-20 日(土・日)[日英国際シンポジウムの予定]、5月 11 日(土)、6月 29 日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20 世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム：通りすがりの善意について】

アメリカはメリーランド州立大学にあるプランゲ文庫に関心を持ち、手探りながら調査を始めるようになって今年で 10 年目となる。同文庫を訪れたことがきっかけとなり 20 世紀メディア研究所との縁を得たことを思えば、自らの研究者人生の要所にプランゲ文庫があるといえるだろう。訪問スケジュールを考える時期を今年も迎えるにあたり、数年前に経験した記憶がふとよびおこされた。

海外調査に赴いた経験を持つものならば、多かれ少なかれ現地での緊張や心細さについて知っているだろう。プランゲ文庫に残されている膨大な資料に比して、自らが持つ時間と能力はあまりに些少であることを思い知らされ、何とか予定の調査を終えて帰国の途に着く。その年はアメリカを朝早くに立つ便でのフライトだったため、まだ暗闇が残る早朝に空港までのシャトルバスに乗った。

30 分程の時間を過ごすことになるシャトルでの同乗者は、当然ながら毎年異なる。その年は早朝ということもあってか、私のほかには同年配とおぼしき一人の白人女性がいるだけだった。ドライバーは陽気な黒人男性で、カーラジオから流れるポップスにリズムをとりながら、まだ暗いハイウェイを空港へと向かう。この曲は何だったろう、などとりとめもなく考えていたら、隣席の同乗者と目があい、どちらともなく笑みを交わして会話を始めた。

こんな早いフライトなんてはじめてよ、という彼女は、シカゴに帰るところだった。あなたはどこへ行くの？ と聞かれ、日本だと答えたら目を丸くして、そんな遠いところに！ お仕事なの？ と続けて聞く。思えば、調査での滞在時はさしたる知人もいないことから、こうした何気ない会話がありがたかったのだろう、ぼつぼつと自分が研究目的で滞在していたことや、研究について話すことになった。そしてプランゲ文庫のことも簡単に説明した。

そう、メリーランドにそんな場所があるのね、と彼女はいい、そしてあなたは遠い日本からそうした資料を自分の目で確かめに来たのね、すごいことね、と続けた。アメリカ流の社交辞令と知りつつ、つい気恥ずかしくなった私は研究のめどすら立っていなくて、と日本的な謙遜の返答をした。すると彼女は、何いってるの！ 私はアメリカ国内でも、シカゴと DC くらいしか行ったことがないのよ。研究を続けて、外国まで調査に行く人たちはすごいと思うわ、と私の目を見て伝え、最後になっこりとほほえみ、I'm proud of you. と付け加えた。

会話が終わるころ、シャトルも空港についた。もう暗闇は消え、薄い水色の明けの空が広がっている。いつかシカゴに来てみてね、日本よりは近いわ、と彼女は笑ってバスを降りた。

そして私が降りるとき、ドライバーは、今度はシカゴにも行かないとね、 Safe Flight と
言ってスーツケースを手渡した。

[1月23日付 文責:鈴木貴宇]